

序章 貴方選ばれ、私は生まれる

自ら部下達に、それも末端の軍人達に指示を出しながら、彼は第三研究所を見上げていた。幾度かの爆発で、古びていたその研究所は、何かきっかけさえあれば崩れそうであった。人通りも少なく、いつも静かな場所であったが、この晩だけはざわついていていた。

「…さて、救護車が奴らを運んだところで、もう一度見ておくか」

その呟きは周囲の喧騒に消え、誰にも聞かれる事はなかった。

彼は長い廊下を歩き、ひしゃげた扉の部屋を見つけると中へと入った。錬金術で不自然に歪んだ床に目を落とし、先程まで焰の錬金術師が倒れていた辺りを探ると、目的のものがあつた。拾い上げれば半分以上が砕け、すっかり小さくなってしまった紅い石だった。

「まだ使える。これをまた育てるか」

彼はそれをそつとハンカチで包み、懷にしまうと部屋を後にした。研究所の門を通る時、警備の軍人の一人がぼろぼろになった軍服の切れ端を手をしているのを見かけ、彼は声を掛けた。相手はその布を差し出し、ロイ・マスタング大佐のものだと思われます、と付け加えた。彼はそれを受け取り、自分から彼に渡しておこうと言った。

「だ、大總統閣下自らですか…？」

相手は、驚いたように目を見開いた。

「見舞いがてら、彼から詳しく話を聞こうじゃないか」

彼はにっこりと微笑み、車に乗り込むと研究所を後にした。

「なんで生かして帰した!!」

彼の姿を見つけた途端、エンヴィーが食って掛かった。キング・ブラッドレイは大總統府には戻らず、研究所からそのまま仲間達の元へと姿を現した。持ち帰った紅い石を見せても、エンヴィーは納得などしない。傍で呆然と立っているグラトニーは、石を見せると一層悲しそうに、もう存在しないホムンクルスの名を呼び続けた。

「ラスト、それで生き返らせないの？」

しかしブラッドレイは答えず、正面でまっすぐ自分を見つめるもう一つの影に視線を送った。その影も、彼に問い掛けた。何故、焰の錬金術師を逃がしたのかと。彼は自信に満ちた様子で、まだ利用価値があるからだと答えた。

「ロイ・マスタング…。彼の強さは、弱さにもなり得る」

ブラッドレイの片目には光が宿っていた。何か、策でもあるのだろう。それを信じて影は頷き、彼にマスタングを一任すると言い残して去っていった。

「おい、それ…使うのかよ」

ブラッドレイの行動に納得がいかず、そのまま付いてきたエンヴィーは、彼が開けた扉を見て更に眉を寄せた。

「焰の錬金術師の最大の強さであり、弱点だ。彼がああもしつこく我々に食らい付くのは、これのせいだ」

ブラッドレイは部屋に入ると、中央に置いてある棺に歩み寄った。どつしりとしたそれは蓋も硬くて重そうであったが、普通の棺と違うのはそれが透明で中が見える事と、その隅から長くパイプが伸びており、それが部屋の外までも続いている事だった。

「冷凍保存しておいて正解だった」

「俺が殺った奴だろ。今更何を…」

エンヴィーが中に保存されているものを覗き込みながら、腕組みをした。するとブラッドレイはハンカチで包んでいた紅い欠片を取り出し、棺の蓋の上にそっと置いた。それが何を意味するのか察したエンヴィーは、信じられないと言った風に相手の顔を見た。

「ラストの石を、こいつに使うのか?！」

「生き返らせるのではない。基盤として使うのだ」

ブラッドレイの置いた石の欠片は、ゆつくりと蓋に吸い込まれ、中に収められた人の形をした物体に降り注いだ。

賢者の石は生きた人間を材料に作られる。しかしただ材料として使っただけでは、石はほんの小さい欠片に過ぎず、その効力も微々たるものである。その石の未完成品はいわば、受精卵。何千万という要素の中からようやく出来たたった一つの結晶である。それを石の形に育てる為には、子宮つまりは母体となるものが必要だった。母体に寄生させ、その結晶を少しずつ育てていく。そしてその母体の材料もまた、生きた人間の身体である。いわば生け贄となるその母体を、敬意を込めて『マザー』と呼んだ。

「待てよ、これは死体だぜ？母体になんてなれっこない…」

「確かに普通に生成した石の結晶なら、これは役立たない。けれども一度完成した石の修復になら使える」

ブラッドレイはゆつくりと口の端を上げ、棺に視線を落とす。賢者の石が、棺に納められたその死体の核となつて細胞を活性化する。肉体は冷凍保存していたから殆ど損傷は無い。核で復活したこれはほぼ生きている人間と同じ状態となる。そして今度は石の修復の為、その血や肉を提供し続ける。ここに循環の図が出来上がる。

「まあ君がつけた弾丸の後やら、ラストの付けた肩口の傷はそのま

まだがね。元々軍人だから体力もあるし、この身体はいい基盤となるだろう」

「ただの母体なら、こいつでなくても代わりは幾らでもあるだろ。それに男にマザーって…」

「人間の身体であれば、性別など大した問題ではない。言つた筈だ。焰の錬金術師の弱点を最大限に利用するには、ここで石を作るのが一番安全なのだ。万が一彼に石を突き止められたところで、彼にこの身体から石を引き摺り出すだけの非情さがあるだろうか」

その口調は、敵への対策というよりも、どこかゲームとして楽しんでる雰囲気があった。

「それにラストの石には、既に彼の魂が吸収されている」

エンヴィーは表情を歪めながらも、判ったよと大げさに溜息をついた。マスタングの件は、彼に一任されているのである。今更横から何を口出ししようと、どうしようもない。

先程棺の上から降り注いだ石の欠片は、冷たく凍った死体に浸透していき、少しずつではあるがその体内で最後の力を発揮し始めた。「ラストの石は思ったよりも傷ついてはいない。十日もすれば、この身体は復活するだろう」

ブラッドレイはまるで我が子が目覚めるのを待つかのように、棺を覗き込んで満足そうに頷くのだった。

第二章 紅く濁った海の中

ロイ・マスタングは見晴らしの良い小高い丘の上に、一人立っていた。空は晴れ渡り、風が気持ちよい日だった。

「なあ、お前を殺めたのは、あの女では無かったのか？」

墓標に向かって、彼は問い掛けた。返事はないが、親友の少し困ったような表情が浮んで、そしてすぐさま消えた。戦った相手は、止めを刺せなくて残念だったと言っていた。まだ仲間が居るのだろう。親友の死因は頭部に貫通した弾丸であったが、少なくとも彼を知っていたという事は、彼女もその死に絡んでいた筈である。病院を無理やり退院し、まだ完治していない腹の傷が痛んだが、それ以上には身体の内側がじわじわと鈍い痛みを訴えていた。解剖結果にあった彼の右肩の傷は、自分の腹に残る跡と同じものかも知れない。串刺しにされる気分は、決して良いものではないかと、マスタングは苦笑いを浮かべた。

「ホムンクルスだとか、賢者の石だとか。少しずつだが前に進んでいる。お前の残した言葉がまだ良く判らないが、軍の人間が何かしら関わっているのは、確かしい」

そこまで報告をして、彼は急に黙りこんだ。言葉にする代わりに、心でそつとすまないと言った。いつも彼の事は思い出していたが、墓参りに来るのは初めてだったのだ。ずっと振り向かないと決め、葬儀のあの日以来、ここに来ることを躊躇っていた。いつでも彼は傍にいて、今も姿は見えないけれども自分を見守ってくれている。そう信じているから、墓の文字を見てしまったら、何かを認めてしまいうまいそうで恐れていたのかも知れない。それでも足を運ぼうという

気になったのは、先日の第三研究所でのホムンクルスとの一戦があったからである。彼女の口から親友の名を聞き、その死がようやく受け止められた気がしたのだ。

「だってそうだろう。お前が死んだと報告を受けて中央へ来たのに、棺が土に埋められるまでただの一度も、お前の死体と顔をあわせていないのだから」

確かに今おもえば不自然だった。殺された現場の写真は見せられた。霊安室の写真も見せられた。対面した家族の話も聞いた。断片的ながらも事件の経緯も伝え聞いた。けれども大総統直々の命令で、マスタングは友人の死体と面会をさせて貰えなかった。

「パパ、寝ていたの。起こそうと思ったら、おじさん達に止められた。だからパパに触っていないの」

彼の娘はそう言った。家族は顔を見ているものの、棺越しに、しかも蓋をずらした隙間から、中を覗き込んだだけだという。本当に本人確認だけの家族の対面のようなだった。

「解剖結果も聞いた。全てはあの死体がお前だと指し示し、そこには生きているという望みはなかった。しかし…」

マスタングはゆっくりと跪いた。墓石の文字を指で辿りながら、この土の下を掘り返してみたいという思いを必死に押し留めた。

「私は、お前とさよならもしていないんだぞ」

悔しげにそう呟いた時、マスタングは背筋に悪寒を感じて振り返った。しかし背後には、長く続く草のなだらかな斜面と、遠くに見える民家しか無かった。確かに視線を感じたと思ったが、このところ事件が立て続けにあったせいで疲れているのだろう。日も翳り、風も少し強くなってきたので、マスタングは立ち上がり、膝の埃を払うと踵を返した。

「また来る…」

今度は良い報告をすると告げ、彼は墓地を後にした。

「また、様子を見に行っていたのか」

ブラッドレイは、帰ってきた男を見つけると声を掛けた。呆れたようなその科白に、彼は小さく詫びを告げた。

「…記憶は失くしていないのだから、仕方が無い。君もまだあの男を忘れられないのだろう」

ブラッドレイは手招きをし、傍に來た彼の腕を勢い良く引くと、バランスを崩したその身体を抱き締めた。

「それでも、もう君は我々の仲間なのだから、ある程度は我慢をしてくれないと困るよ」

「…はい…」

頷く彼の頭を、ブラッドレイは優しく撫でた。ふと視線を下に落とすと、彼がしっかりと握り締めているものが見えた。

「…まだそれを持っていたのか」

ブラッドレイはその腕を掴み、目線の高さに掲げた。青い軍服の切れ端だった。彼が石の力で起き上がった時、その布は彼の棺に一緒に入れられていた。まるで雛鳥が初めてみた相手を母親だと慕うように、彼はその布をずっと持ち続けていた。

「マスタングの事を忘れさせない為に、その布を君に与えたが、その必要は無かったようだな」

石の力で再生した身体に、生前通りに記憶が残るかは定かでない。しかし情報源として、マスタングの存在は重要だった。マスタング自身は用心深く、なかなか周りにも自分のことを漏らさない

が、親友であるこの男にだけは何か告げたり見せたりしている可能性は高かった。何より彼の近くでずっと魂に寄り添っていた相手だけに、その記憶を呼び覚ます必要があった。そのきっかけとして、マスタングの布が役立てばと思ったのだ。そして何よりこの男が、石の話やホームンクルスについて、どこまで調べ上げていたかも重要だった。それは既にラストを通じて何度か探っていた。

「君の記憶は全てでは無いにしろ、ほぼ完全な形で、しかも我々に従順な心と共に甦った。とても助かるよ」

彼はエルリック兄弟と関わった事で、石の事を調べていたが、それを一人で探っていた為、彼の突き止めた情報は殆ど外部に漏れていなかった。あのマスタングさえも、彼から情報を伝えられることなく引き離されていた。

「君は本当に頭がいい。欠点を挙げるとしたら、それを一人で抱え込んでしまう事だ。…まあ、こちらには都合だった訳だが」

賢者の石を、彼の身体に埋め込んで二週間が過ぎた。冷たかった身体が今では体温を得て、固く閉ざされていた口元は笑みを浮かべるようになった。ただ瞳の色だけは、生前の綺麗な色ではなく、石の影響かほんのり紅が混じっていた。マスタングの対策の一つとして、この復活した身体の管理も、ブラッドレイに任されていた。大きな息子を得たように、彼は楽しんでた。

「私には息子が一人居るが、彼とは年が離れ過ぎて望むような会話は出来ないのだよ。私の方が氣を使ってしまうている。君とはもっと大人の会話が出来そうだな」

そう言っただけでブラッドレイは新しく出来た息子を、いとおしんだ。

但しそれは愛情ではなく、玩具としての楽しみだと彼自身が思っていた。

新たな息子は、生命が与えられたと同時に、石を育てる容器として活動している。ブラッドレイは彼を呼び寄せ、その胸に埋め込まれた石の欠片に目を落とした。一日ごとに少しずつだが、石は輝きを取り戻している。それをチェックするのが、彼の日課となっていた。彼のシャツを剥ぎ、ベッドに横たわらせ、じっくりと石を観察する。ただそれだけであつた。

その日も観察だけで終わるはずだった。いつものようにシャツを脱ぐよう指示を与え、横たわるその身体を見つめていた。ただこの日は見るだけでなく、その石の大きさを確かめるように埋め込まれた周辺の肌をぐるりと指でなぞつてもみた。すると相手はその指にびっくりしたのか、肩を少し震わせ、ぐつと目を閉じた。

「…驚かせたか、ん？」

黙って頷く彼を見ている内に、ブラッドレイはなんとなくであるが、その他の部分にも触れてみようという悪戯心が沸いて来た。普段とは様子の違うブラッドレイに、彼は戸惑っていたが、ズボンを脱がし、下着をずらし、ごつごつとした指が太腿をまさぐり始めた時、思わず声をあげた。

「…ま、待って下さい…」

行為の意味にさっと頬を染め、やや逃げ腰になる身体を抑えつけ、ブラッドレイは指の動作を大きくしていく。

「そうか、君はマスタングと…こういう関係だったね」

調べた資料にあった項目を思い出し、ブラッドレイは頷いた。男を知らぬ身体ではない。そうと判れば、楽しめる。彼は自分のズボンのベルトに手を掛けた。服の擦れる音がやけに大きく響き、相手

は思わず顔を背ける。それを無理やり手で押し戻し、ブラッドレイは真正面から彼を見つめた。その間にも、もう片方の手は下半身を探り、後ろへと指を伸ばしていた。

「何を恐れる。彼とは生前、何度も交わっていたのだらう？」

相手は瞳をやや曇らせただけで、答えなかった。ブラッドレイは掴んでいた顎を離してやると、空いた両手で彼の太腿を抱え上げ、そして露になった秘部に触れた。その瞬間、相手の腰がびくりと跳ね上がり、何か言いたげに口が開いたのを見逃さなかった。けれども言葉は紡がれず、代わりに拒絶の視線が向けられる。怯えはしても力で抵抗しないのは、彼にとつてブラッドレイが逆らうことの出来ない地位の相手だからであつた。それでも嫌がる気持ちは雰囲気にも滲み出て、ブラッドレイの苛む気持ちちが煽られた。

「そうか…。彼に義理立てしているのか。ここは、彼のものという訳だな」

ブラッドレイは口元を弛めた。だったら尚更こじあけてみたくなると、彼は慣らしもしていないそこへ、指を突き立てた。声にならぬ叫びが空気を震わせた。じわじわと指の皺に血が滲んでいく。

「傷つこうとも、石の力ですぐ回復する」

息子を宥めるような口調で、彼は血のぬめりを利用して指をどんどん奥まで侵入させた。やがてブラッドレイは、蒼ざめたその顔に唇を寄せ、指でこじ開けたそこへ向けて下半身を構えた。

「もう君は、マスタングのものではない」

低い声で呟き、彼は愛しい息子を無理やり貫いた。

「へえ、本当に生き返るなんてな」

翌朝、久々にブラッドレイの様子を見に来たエンヴィーは、ベッドで寝息を立てている男をちらと見て、鼻で笑った。

「呑気なもんだね。殺った張本人がここに居るつてのに、起きやしない」

「…彼は、生前の記憶はあるが、それ以上に私に従うよう作り変えてある。もうかつての彼ではないのだ」

「じゃあこの姿を見ても、もう動じないのかな」

エンヴィーはぱっと姿を変え、寝ている相手の妻の笑顔を真似ると、その顎髭をついと撫で上げた。ふとその首筋に幾つもの紅い跡があるのを見て、彼はブラッドレイを振り返る。

「…あんた、こいつとやったのか」

ブラッドレイは答えず、軍へと出向く為に着替えていた。

「趣味悪いな…男なのに。ごつごつの身体抱いて楽しいわけ？それとも女よりも、こっちの方に目覚めたのか？」

しかしブラッドレイは、そんな挑発は無視して身支度を済ませると、もう出るから鍵を閉めるぞと告げ、寝室を出て行った。一人部屋に残ったエンヴィーは元の姿に戻ると、もう一度寝ている相手を見つめ込み、両手を腰に当てて、小首をかしげた。

「抱くのが趣味なんじゃなくて、単に焰の大佐への腹いせかな」

そう呟くと、彼は寝室の扉を閉めて去って行った。

「賢者の石は、順調に回復しているようだな」

ブラッドレイは、座ったまま自分に問い掛ける影に大きく頷き、説明を始めた。

「石が彼の身体を再生させ、その身体がまた石に栄養素を与える。良い循環です」

「ラース…、その復活した身体の持ち主だが」

彼をラースと呼んだ影は、書類を差し出した。ブラッドレイはそれを受け取り、目を通す。

「彼は幼い頃に両親を亡くし、そのあと孤児院に引き取られたが、やがてそこは戦争で崩壊。幾度か住処を転々とし、最後に引き取り育てられた夫婦は農家だったようだ」

紙に細かく書かれたデータを見つめる彼に、影は補足するように語り出した。

「夫婦は孤児達を数人養っていたようだ。その育ての親と死に別れた後は、彼がその妹や弟達を育てていたらしい。そしてその義理の兄弟達も、南部の戦争で失った」

黙って聞いているブラッドレイに、何を言いたいか判るかねと影は問い掛けた。彼がいいえと答えると、口の端を上げ言葉を続けた。

「愛情に飢えているんだよ、彼は。幾度も家族を失い、必死になって守ろうとするとまた奪われていく。あのマスタングに、無理強いされて身体の関係を強要された時も、彼はそれを拒む以上に友情を失いたくなくて、それを愛情と摩り替えた」

「…彼が結婚をし、子供を得ても、飢えは満たされなかったと？」

ブラッドレイの問いに、影は重い腰を動かし、立ち上がった。

「あの男は逸材かも知れぬ。愛情を充分に与えられなかった分、自分が他人に愛情を注いで、己の心の穴を埋めようとしているのだ」

「確かに、彼は生前、軍でも有名な家族思いの親馬鹿で、お節介焼きだと聞きました」

影は、ブラッドレイの肩にそつと手を置いた。

「母体となるべき素材は、十分な母性を備えてこそ価値が出る。お前がああ男に石を寄生させると言った時、初めは成功しないと思った。女性に比べ、男性の中の母性など微々たるものだからな」

しかし結果として彼の選んだ肉体は、石には適した身体だったと影は褒めた。恐れ入りますとブラッドレイは頭を下げた。

「…いずれ私も、その肉体に会いに行こう。お前達にとつて、彼がマザーとなるように、私にとつても彼は大事な母体だ。そう…彼の名は、何といったか…」

影は、ブラッドレイの手にある書類を見やつて思い出そうとした。

「マース・ヒューズです」

「そうだな。ヒューズ准将か」

影は幾度か頷くとろのろと歩き出し、暗い部屋の隅へと消えていった。ブラッドレイは、彼の座っていた玉座に分厚い錬金術の本が置かれているのに気付き、じつと視線を注いだ。

（父よ…、焰の錬金術師をどうするおつもりか）

マスタング自身はともかく、彼に何かあればヒューズが苦しむ。

それが石の成長を妨げなければいいのだが、とブラッドレイは危惧していた。

宇宙手感体

mother

～寄生する闇もしくは光～

mother I ～motherⅢ・DL 版

ロイ×ヒューズ／ブラッドレイ×ヒューズ

体感宇宙

あきやまさとる

<http://taikan.main.jp/>

[akiyama_0yaji☆yahoo.co.jp](mailto:akiyama_0yaji@yahoo.co.jp)

(☆を@に変えてからメールを送って下さい。)

080401

体感宇宙 BOOK No. 46

※この PDF ファイルは体験版です。ご購入いただくと、総ページ数 200 ページの正式バージョンがダウンロードできます。正式バージョンは **mother** シリーズの 1 作目から 3 作目まで全てと番外編 2 本を含んだ、合計 5 本の小説です。キャラクターの絡みも内容も濃い目になっております。体験版でお気に召した方は是非正式バージョンをお楽しみ下さい。ご購入にあたっては、DL サイトの諸注意を熟読の上、ご検討下さい。